

今、不軽菩薩の跡をゆかなくては

(日蓮宗現代宗教研究所嘱託)

梅 森 寛 誠

梅森でございます。この度、研究発表させていただきます。論題は、「今、不軽菩薩の跡をゆかなくては」ということで、以前に提出せよと言われた要旨、これをお読みしたいと思います。「宗門には大きな宝がある。ご存じ不軽菩薩の礼拝行はその代表といえる。これは非暴力のあるべき姿に他ならない。『暴力に対抗できるものは敬愛』と市民運動側からも。宗祖の『不軽の跡を紹継』との明言を継ぐべき私たちには今、暴力の連鎖に向かいつつある世界情況の中で、訴える使命がある。戦後六〇年、九条改憲の動きを憂慮する世界市民に対しても、立正平和運動の実績をもつ私たちは、その至宝に磨きをかけなければ。」ということでございます。話したいことはいっぱいあるんですけど限られた時間でたぶん無理だろうなと思います、たくさん、と言っても六つほどの資料を用意しました。

まず、その前提となるのは、ちょうど昨年の今頃、東北教区の教研会議で企画し、「非暴力の実践―現代に於ける不軽菩薩とは―」というレジュメを用意して提起したもののなんですが、一年経つといろんな出来事が出てくるもので、これを再提起すると同時に、その後、いろいろな方面で見聞したり体験したりする中で得たもの、特にこの問題は宗門内にいるよりも他教団他宗門の人たちとお付き合いすると非常によく見えてくるという特質があるんですが、その辺も交えてご紹介できればいいな、と考えております。で、今日は十一月二十九日ですから、ちょうど一月前に、沖縄である大きな事件がありました、そのことも後半、述べたいと思います。

まずは、昨年の「現代に於ける不軽菩薩とは」ということですが、ざっと説明しますと、まず、今の時代が暴力に

シフトする時代にどんどんなってきた、と。ご存じ二〇〇一年の九・一一以来、そういう状況の中でイラク戦争に突入するということは、今更言うまでもなく世界市民が憂慮していることとございます。そういう中であつて、宗門は二度ほど、イラク問題に関する声明を発表しました。そのことも資料の中に入れておきました。昨年は、そのことをまず提起しながら、じゃあ何ができるんだろうかというようなことの中で、また、その前に話題になりました。受折伏の問題も論議されましたので、これはやっぱり、不軽菩薩のあり方を我々が見つめることを通じ、撰受・折伏を超えた、いわば止揚していくという意味のこともできるんじゃないか、と考えました。つまり撰受と言おうと折伏と言おうと、我々不軽の跡を継ぐんだと。これは日蓮聖人が『聖人知三世事』で、その通りの言葉で明言しておりますから。やっぱりそこに集約できるんじゃないかなと思うんですね。で、そうしたことを昨年、提起しました。

講師としては、国際NGO『非暴力平和隊・日本』の共同代表として活動している大畑豊という人を招きましてお話をいただき、この『非暴力平和隊』、nonviolent peaceforceというパンフレットも用意いたしました。非暴力ということですが、受け身の非暴力という、何もしない・耐え忍ぶという形ではなくて、積極的に、この非暴力のあり方がそがこれからの国際平和のためにはならないということで、特に紛争地域に派遣する、ということとをここでは行っているんですね。その中で、例えば、地元の活動家に同行する「護衛的同行」というのがあるんですが。つまり、暗殺しようとする人たちから生命を守るために、そこについている、ということ。やっぱり敵対する勢力としては、そこに外国人がいるというのは非常に暗殺しにくい状況でして、そうした環境を作っていくということとです。で、非暴力の考え方をどんどんそういう形で訴えていくというやりかた、これは代表的一例です。そのあたりのことから、ああこれは不軽菩薩のことを言ってるんじゃないかと、感じたわけなんです。

また、先ほどもちよつと引用ありましたけど、常不軽菩薩品の中で「避け走り遠く住して」拜む、という所がありますね。つまり、殉教者を目指して命を捨ててとことんやっていって、というふうなものではなくてですね、危なく

なれば、ちよつと避けて遠くからでも何度も何度も、それでもあなたを拝みますよと、執拗に訴えていくということですね。玉砕するんじゃない、自爆テロじゃないんですよね。そのあたりのことを、やはりこのNGOではきちんと言っている、やっぱり常不軽菩薩品に書いてある通りだと思つたわけです。暴力に対して挑発されない、ということなんです。イラクで当時「人間の盾」というようなことが報じられてましたけど、それを目的とするんじゃない、銃口の前に身をさらすんじゃない、非暴力で対峙するその存在、プレゼンスこそが重要と強調されてました。不軽菩薩ということ、今のNGOで活躍している人たちから、かえつてよく教えられているという気がします。

で、その後、いろいろな場面で、他教団の人も市民も含んだ集会で、非暴力のことを考えましょうというような機会がありました、私がここで自己紹介したことは、やはり宗教者としての立場で表現するんですが、教義としての不軽菩薩というもの、礼拝行があるんだということをまず申します。もう一つは、実績面では、この私が属する教団、宗門は立正平和運動というものを五〇年前にやっているんだ、と言います。やっぱりこの二つは強いですよ。確かに今の現状という問題はありますが、そのことはそのこととしてね、非常に説得力をもつものだなということを実際に感じていきます。

現実には、市民運動の側からも、先ほど要旨で述べましたけど、暴力に対抗できるのは敬愛だと、相手を拝むことだというふうに言われはじめていますね。だからやっぱり、権力の大きな力に対しても、手を合わせて、相手を尊重していく、それを執拗に繰り返していくことなんだ、ということ、息の長い何十年と続いている市民運動の人たちも徐々に分かってきているというわけです。

で、そうしたことの中で、私自身が少々関わったものに、韓国のある一つの運動があります。これはカトリックの神父さんが主導的になさっている運動なんですが、韓国の南西部・全羅北道で、セマンダム干拓という大規模な干

拓事業が強行される事態に対して、また核廃棄場反対闘争に、立ち上がったものなんです。三歩一拝運動という運動を提起した。ソウルまでの三〇九キロ、六五日間、とにかく三歩行つて礼拝する、これをずっと繰り返してソウルまでたどり着くという、そういった壮絶な運動をやった。今年の二月に訪問しまして、私は、ああ、カトリックの神父さんだけ、仏教者以上に仏教者だ、と、思わず感動の言葉をささげました。まさしく、仏教の三毒、貪・瞋・痴と同じような行いに対して懺悔する、という言葉、このムン・ギュヒョンという神父さんも掲げています。また、異なる宗教者と共に、仏教者もいる、プロテスタントもいる、現地の宗教もある、そういう人たちと共に、歩く、ということをやっている。私に言わせれば、法華経をそのまま実践してるんじゃないかな、と思わせられるような感動を受けました。(写真を示し) こういうような形で、ずっとお辞儀をして礼拝してソウルまで行つた、ということ。日本のマスコミは、非常にお行儀のいい運動だなんて茶化すこと言いましたけど、決してそんなもんじゃない、と現地に行つて受け止めたわけです。

では、沖繩のある事件、ということになりますが、こちらの「日本山妙法寺僧侶不当逮捕勾留事件の経緯」を見ていただきます。これは、たまたま速報に接することになりました。逮捕された翌日の段階で、友人から連絡がきまして、そういう情報を得たので、少々関わることになりました。その日、この日本山僧侶は、嘉手納基地の第二ゲート前でビラ配りをしていました。すると、警察が来てビラ配りは止めろと言われて、一旦はそれに従う。ですが、その理由は何ですか、と警察に問いたですと、向こうは答えられないわけですね。その背景には、今のこの国を取り巻く沖繩という問題があるわけで、そのことはここでは述べません。それで、そのことに対して答えられない中で、たまたま緊急出動を命ぜられた。ということ、パトカーを急発進し、そのお上人は転倒してしまう、となった。いわば、警察が傷害罪あるいは下手すると殺人未遂罪を負いかねないという事態だった、と。私は現場にいなかったんですが、いろんな人たちの情報を集め、また釈放されてから一週間後に、そのお上人の所に行つてじかにお話を聞いて確認し

ていることなんです。そういった、いわばでつち上げで逮捕される。しかも、それにとどまらずですね、普通は集会が終われば釈放されるわけですが、それでも釈放されない。で、ぎりぎりまで延ばしに延ばされてですね、結局二〇日間勾留され、十一月十七日に釈放される。最初からこれは、起訴できないというようなことだったと思うんですね。

私は、この大きな一つの事件に接しまして、そのことが全然伝えられないということに対しても、非常に事件同様に衝撃を受けております。琉球新報と沖縄タイムスが現地で、また東京新聞がこのような形で取り上げました。全国紙ではほぼゼロです。私のレジュメの表紙にあげた仏教タイムスと週刊金曜日の記事は、辛うじて目にしたものです。皆さん方で、他にご覧になってる方ありましたら、おっしゃっていただきたいと思いますが。とにかく、沖縄の問題もそうですし、私がいろいろやってる原発や六ヶ所核燃の問題もそうなんです。国策で、市民がすっかり分断されて、加害者にされている。情報も与えられない。そういう時代状況が進んできている中であって、我々はどういう位置に立っていないかならぬのかということ、つくづく、冒頭のことに戻りますが、宝としての不軽菩薩のことを思い起こしながら、今後訴えていく必要があると思っております。時間となりましたのでこの辺で。ありがとうございました。